

令和5年度病虫害発生予察特殊報(第1号)の発表について

県内に設置したトマトキバガの侵入調査用のフェロモントラップにおいて、本県で初めてトマトキバガの侵入が確認されました。

現在までに、県内で、本虫による農作物の被害は確認されていませんが、海外での被害状況をふまえ、被害を最小限に抑えるため、今後の発生状況を注視していく必要があります。そのため、関係機関、生産者等へ注意喚起し、生産者が早急かつ十分な対策を講じられるよう病虫害発生予察特殊報を発表しましたので、お知らせいたします。

○病虫害発生予報特殊報について

「病虫害発生予察特殊報」は、都道府県において新たな病虫害の発生を発見した場合、重要な病虫害の生態及び発生消長に特異な現象が認められた場合に、植物防疫法に基づき病虫害防除所が発表します。

○トマトキバガの生態と被害の様子

生態：トマトキバガ(写真2)は、チョウ目キバガ科に属する体長5～7mmの小型のガです。海外では、トマト、ナス、バレイショ等の主にナス科植物に被害を与える害虫として知られています。国内では、トマトにおいて被害が認められていますが、国内における生態の詳細は不明です。

被害：トマトでは、葉の内部に幼虫が潜り込んで表皮を残して食害するため、葉が薄皮状になり、白～褐変した外観となります(写真3)。果実では、幼虫が内部に食い込んで内部組織を食害するため、果実表面に数mm程度の侵入痕が生じるとともに、食害部分が腐敗します(写真4)。

○トマトキバガの生態と被害の様子

トマトキバガは、改正植物防疫法(令和5年4月1日施行)に規定された侵入警戒有害動植物のうちの一つです。本県では、昨年度からフェロモントラップによる調査を実施しており、本年10月17日の調査時に誘殺を確認した成虫(写真1)を横浜植物防疫所に送付し、同定を依頼したところ、本県未発生のトマトキバガであることが10月20日に判明しました。国内では、令和3年10月に熊本県、同年12月に宮崎県のトマト栽培圃場で確認されており、それ以降、フェロモントラップ調査による確認も含め、全国35道府県で発生が確認されています(10月24日現在、本県含む)。

なお、現在のところ、県内では本種による農作物の被害は確認されていません。

○防除対策について

圃場内をよく見回り、見つけ次第捕殺します。また、発生を拡大させないため、被害葉や被害果は、圃場から持ち出し、野外に放置せず、ビニル袋に入れて一定期間密閉して成幼虫を死滅させるなど、適切に処分を行います。

令和5年10月18日現在、トマトキバガに対する登録のある農薬の適用作物はトマト、ミニトマトのみです。薬剤防除にあたっては、最新の農薬登録情報を確認し、薬剤抵抗性の発達を防ぐため、IRACコードの異なる薬剤のローテーション散布を行います。



写真1 フェロモントラップに誘殺された成虫



写真2 トマトキバガ成虫（左・中）と終齢幼虫（右）



写真3 トマトの被害葉（飼育個体）



写真4 トマトの被害果（飼育個体）

（写真2～4は、農林水産省植物防疫所原図）

令和5年度

病虫害発生予察特殊報 第1号

令和5年10月24日
茨城県病虫害防除所
TEL：0299-45-8200

トマトキバガの発生について

害虫名：トマトキバガ
学名：*Tuta absoluta* (Meyrick)
発生作物：-

1. 発生確認の経緯及び県外での発生状況

- (1) 令和5年10月17日、県内4地点に設置したトマトキバガの侵入調査用のフェロモントラップにおいて、本種と疑われる成虫が誘殺された（写真1）。横浜植物防疫所に同定を依頼したところ、3地点において誘殺された個体が、本県で未発生であるトマトキバガであることが確認された。
- (2) 現在のところ、県内では本種による農作物被害は確認されていない。
- (3) 本種は、国内では令和3年10月に熊本県、同年12月に宮崎県のトマト栽培圃場で確認された。それ以降、フェロモントラップ調査等によって、これまでに本県を含めて合計35道府県で特殊報が発表されている。

2. 形態の特徴

- (1) 成虫は、翅を閉じた静止時で体長5～7mm（前翅長約5mm、開張約10mm）。前翅は灰褐色の地色に黒色斑が散在する。後翅は一様に淡黒褐色で、翅頂下でえぐれる。（写真2）
- (2) 終齢幼虫は、体長約8mm、体色は淡緑色～淡赤色で、頭部は淡褐色である。前胸の背面後方に細い黒色横帯がある。（写真2）

3. 生態の特徴

- (1) 1年に複数の世代が発生し、繁殖力が高い。発生世代数は環境条件によって異なり、年に10～12世代発生する地域もある。雌は一生のうち平均で約260個の卵を寄主植物の葉の裏面などに産み付ける。
- (2) 卵から成虫になるまでの期間は24～38日程度で、気温の低い時期はさらに延びる。
- (3) 成虫は夜行性で、日中は葉の間に隠れていることが多い。幼虫は1齢から4齢までの生育ステージがあり、土中や葉の表面で蛹化する。

4. 被害の特徴

- (1) トマト、ナス、ピーマン、バレイショ等のナス科植物が主な寄主植物であるが、マメ科のインゲンマメも寄主植物として確認されている。
- (2) トマトでは、葉の内部に幼虫が潜り込んで食害し、葉肉内に孔道が形成され、食害部分は表面のみを残して薄皮状になり、白～褐変した外観となる（写真3）。果実では、幼虫が穿孔侵入して内部組織を食害するため、果実表面に数mm程度の穿孔痕が生じるとともに食害部分の腐敗が生じる（写真4）。

5. 防除対策

- (1) 圃場内をよく見回り、見つけ次第捕殺する。
- (2) トマトキバガの発生が疑われた場合は、速やかに最寄りの農業改良普及センター、病虫害防除所に連絡する。
- (3) 発生を拡大させないため、被害葉や被害果は、圃場から持ち出し、野外に放置せず、ビニル袋に入れて一定期間密閉し成幼虫を死滅させるなど、適切に処分する。
- (4) 現在、トマトキバガに対する登録のある農薬の適用作物はトマト、ミニトマトのみである。薬剤防除にあたっては、最新の農薬登録情報を確認する。
(農林水産省「農薬登録情報提供システム」<https://pesticide.maff.go.jp/>)
- (5) 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、IRAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。



写真1 フェロモントラップに誘殺された成虫



黒色横帯

写真2 トマトキバガ成虫（左・中）と終齢幼虫（右）



写真3 トマトの被害葉（飼育個体）



写真4 トマトの被害果（飼育個体）

(写真2～4は、農林水産省植物防疫所原図)